

Top Interview

トップインタビュー

— 変革に挑む —

まとめ／堀水潤一 撮影／近藤真悟

時代、世界、地域を見つめ 「多文化共生社会」を強く しなやかに生きる人を育てたい

本学、愛知淑徳大学の母体は1905年開校の愛知淑徳女学校です。同校は「10年先、20年先に役立つ人材の育成」という教育目標を掲げ、先進的な女子教育を実践してきました。その精神を引き継ぎ75年に開学した本学は、95年に男子にもその門戸を広げ、男女共学体制に移行。その改革の基礎をなしたのは、「違いを共に生きる」という、当時、全学的な議論の末に生まれた理念でした。多様化が進む社会にあつて、最も基本的な違いである「性差」を乗り越える、という考え方です。校名は残したため「淑徳」という響きから、男子学生に敬遠されるのでは、という懸念もありましたが、受験生に抵抗はなかったようです。明確な目的をもった若者

たちは、「名」ではなく「実」、すなわち求める学び、志す学問を念頭に、本学を選択してくれたのです。

男子学生が入学したことでキャンパスに力強さが加わりました。女子学生は男子という異文化が加わったことで、より思考や行動の幅が広がり、その一方で男子も自立心旺盛な女子学生の中で大いに刺激を受け、人間的な成長が促されていく。多様性は「力」だと改めて感じました。その後「多文化共生社会」という時代のテーマのもと、性差だけではなく、国籍、世代、地域、障がいの有無など、さまざまな違いをこえて互いから学ぶ姿勢が定着。留学制度の拡充、生涯教育、地域連携、施設のユニバーサルデザイン化、学部・学科をこえた学びを制

度化したのもすべて、「違いを共に生きる」という理念が礎となっています。

2006年には「ミニミニティ・コラボレーションセンター」（以下CCC）を設立。学生が学内での学びを生かし、将来の自分の姿をデザインするための「体験教育科目」をより深化させるのが大きな目的です。体験教育科目には、CCCが開設する地域活動やボランティア体験のほか、キャリアセンターの提供するインターシップなどのキャリア教育、国際交流センターが展開する留学や語学の習得を目的とした国際交流センター開設科目があります。CCCを通じた活動として、地域の教育委員会と連携した小学校での外国語教育サポート、在住外国人の学修支援などがあり、学生が主体的に、学びを地域で生かしています。また、近隣の福祉施設で高齢者と語らう『「ミニカフェ」』という活動も始めています。いずれもある種の異文化体験を伴う取り組みです。こうした違いの中に身を置くことにより、学生たちは自らを知り、人間的に大きく成長する機会を得ることができるようになっています。

「違いを共に生きる」という大学理念は時代とシンクロしながら強くしなやかに生きる学生たちのDNAとして引き継がれていくものと確信しています。



愛知淑徳大学
学長
島田修三

【学長プロフィール】しまだ・しゅうぞう●1950年生まれ。横浜市立大学文理学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。愛知淑徳短期大学助教授、教授、学生部長、愛知淑徳大学文化創造学部長、同大学副学長などを経て、2011年より現職。

【大学プロフィール】1975年開学。文学部、人間情報学部、心理学部、メディアプロデュース学部、健康医療科学部、福祉貢献学部、交流文化学部、ビジネス学部の8学部11学科。